

発表題目 到達可能性関係を推論主義的に理解する

大西琢朗 (Takuro Onishi)

所属: 京都大学

推論主義的な論理的意味論、すなわちダメットに由来する証明論的意味論やブランダム流の表現主義 (expressivism) では、論理結合子の役割とは、推論に含まれるメタレベルの構造を、対象レベルの文として表現する (反映する、明示化する) ことに存する、という考え方が一定のコンセンサスを得ているように思われる。たとえば、条件法は、推論における前提と結論の関係を文として表現することを可能にし、連言は二つの前提を一つの前提としてまとめて表現することを可能にする。

こうしたメタレベルと対象レベルの対応関係は、シークエント計算においてもっともよく見てとることができる。とくにゲンツェン型のシークエント計算を拡張したディスプレイ計算は、この対応関係を念頭に置くことで、多くの非古典的な結合子の定式化に成功している。

興味深いのは、ディスプレイ計算に登場する推論の諸構造は、きわめて自然に、フレーム意味論 (可能世界意味論) における到達可能性関係に対応するという点である。このことは、しばしば過剰に形而上学的な意味合いを付与されるフレーム意味論の道具立てに対して、推論主義的な立場からより現実の推論に即した説明を与えられるのではないかという可能性を示唆している。あるいは、両者をたとえばモデル論と証明論、あるいは実在論と反実在論という形で対立させるのではなく、ひとつの論理的意味論として統合的に利用するという可能性として捉えることもできるだろう。

そこで本発表では、様相演算子をモデル化するために用いられるフレーム上の二項関係について、推論主義的な説明を試みる。具体的には、ある種の様相 (必然性) 表現と見なされる「はずだ」という言葉を含む推論を例として用いながら、そのような推論には、それにかかわる諸状況のあいだの関係の成立へのコミットメントが含まれており、「はずだ」という表現はまさにそのコミットメントを「明示化」するものとしてはたらいっていることを示す。本発表の説明は、ブランダムの表現主義および規範的語用論の語彙を用いるが、時間が許せば、到達可能性関係を「情報リンク」ないし「情報チャンネル」と見なす、関連性論理の情報論的意味論との比較も行う。